



なかよし

〈愛知県〉 星野 宏 36歳

かしそうに、でもうれしそうに、誇らしげに私に見せてくれたときだった。

この1枚の絵が、この絵に添えられた「なかよし」という言葉が、この夫婦にとって、どれだけ大きなものだったのかは、残された祖母がこの絵を見つめる表情からうかがえる。1人の人間が生き抜いた人生の最期を笑顔で迎える。その意味は残された者が、愛する人が「故人」になった事実を受け入れる過程において重要なのだと身をもって感じることできた。きっと、この絵を描いてくれた看護実習生は、これからも看護師として多くの方の人生の最期を笑顔で迎えさせてくれるのだろう。

祖父の入院もこれで最後かもしれない。そんな予感があった。専業主婦で長年祖父と連れ添ってきた祖母は、自身も80歳を超え足腰が弱っていた。しかし、周囲が止めるのも聞かず、毎日祖父の元に通い続けた。何をするでもなく、ただ横に座り、祖父から要望があれば、それに応え、帰る。そんな毎日を繰り返していた。

祖母にとっては、それは当たり前の日常であったのかもしれない。しかし、祖父の衰弱が進み、「残念だが、もう病院でできることはない」と言われ、特別養護老人ホームなど施設を探し始めたころには、祖父は言葉を発することもままならなくなっていた。

そんなときに、1人の看護実習生

が祖父の担当になった。彼女は、話せなくなった祖父と祖母が何とかコミュニケーションを取れるように、大きな五十音表を手書きで作ってくれた。そして、実習の終わりに、2人が笑顔で寄り添う似顔絵を描き、写真立てに入れてプレゼントしてくれたのだ。その絵に描かれた文字は「なかよし」。

祖母が結婚して60年。私が母から聞かされていた2人の関係は、順風満帆といえるものではなかった。60年も連れ添っていたら、それもそうかもしれない。私は初孫としてかわいがられ、本当に祖父を慕い、私の心の支えになっていた。その祖母が、最後にそろって笑顔を見せてくれたのが、その似顔絵を、恥ず

